



羅針盤



多田 弥生, 大槻 マミ太郎
Yayoi Tada¹, Mamitaro Ohtsuki²

1: 帝京大学医学部皮膚科学講座 教授, Visual Dermatology 編集委員
2: 自治医科大学皮膚科 教授, Visual Dermatology 編集委員

道なかば, アトラスシリーズにかける塩原哲夫先生の熱い思い

大原先生の撮影された写真は迫力がある。これぞまさに典型、というべき写真には必要な臨床情報が全部詰まっていて、キャプションなど要らないほどである。解剖学的部位で分けた本誌アトラスシリーズでは、大原先生撮影の写真+ α から、編集委員が月1回の会議で疾患と写真を選んで解説をつけてきたが、本シリーズへのこだわりが人一倍強く、シリーズ完成に向けて丁寧な仕事を続けてこられたのが、塩原哲夫先生である。今回のアトラスが仕上がったのは塩原先生のおかげと言えるが、発売前に編集委員を退かれたため、ここでは多田と大槻それぞれの言葉で、感謝の気持ちを表現したい。

多田からの最大の感動と感謝は、塩原先生の仕事の流儀に対してである。

これを多田が最初に目の当たりにしたのは、日本皮膚科学会の「皮膚科女性医師を考える会」委員長としてのお姿である。会員からの膨大なアンケートをまとめて緻密に解析し、問題点を抽出する作業を、手抜きなく本当に丁寧に、コツコツと進められるお姿が印象的であった。女性委員には、指示を出すというより、おのおのから意見を引き出して結論を導くまでの過程を、委員長と一緒に考えさせる場面が多く、女性の人材育成を強く意識しておられたのだと思う。厳しい叱咤のあとには、心に残る激励もあった。この委員会での仕事の流儀をみて、正直、驚いた。外見からの爽やかな印象と、昭和の泥臭い手法のギャップ。しかし、振り返れば固定薬疹や DIHS

の論文も、臨床での気づきから仮説を立てて実際の患者さんでの検証をくり返す中で、多くの説得力ある新知見を導かれたことを考えると、驚くべきことではない。実際、クラシック音楽に加えて、落語やお寿司が大変お好きなことも知り、塩原先生の多面的な奥深さに私の理解が追いついていないだけだとわかった。編集会議ではいつも鋭い意見をおっしゃられ、たくさん勉強させていただいた。(多田)

大槻からは、最強のアイデアマンへの惜しみない拍手を送りたい。

パッと思い出すだけでも、似たもの同士、知ら恥ず、痒ミシュラン、〇〇セレクション(コネクションなんて変化球もあったが)等々。天才的な名付け親であり、そこにはいつも茶目っ気たっぷりの塩原先生が笑っておられた。また、みんな餃子もこよなく愛していただき、学会を主催するたびに宇都宮餃子ネタを出してきた身としては、嬉しい限りであった。今回の足のアトラスシリーズは、そんな塩原先生の編集委員として最後の力作である。塩原節が編集会議で鳴り響かないのは残念だが、私からみた塩原先生はこだわりの医哲学者であり、そして永遠の青年である。引き続き、末永いご指導をお願いしたい。(大槻)

写真: 2020年1月 Visual Dermatology 編集会議にて。左上: 多田, 右上: 大槻, 右下: 塩原哲夫先生。